

福岡県の主な農産物の生産状況

令和2年2月14日現在
(専技情報より抜粋)

◇麦類◇

11月中下旬播きの生育は、播種後から高温に経過したため、平年と比べて2～3週間程度早く、茎立ち期は2月2～4半旬と予想されます。

雑草の発生量はやや多いです。今後、タデ類やカラスノエンドウなどの広葉雑草の発生が予想されるため、早めに対策しましょう。

表面排水を促し、茎立ち期前までに踏圧・土入れをして生育を確保しましょう。

2回目の追肥(穂肥)は2月中下旬に行い、1回目追肥から間もない場合は量を減らしましょう。小麦では、倒伏への影響が小さい穂揃期追肥を基準量より増やします。

◇施設キュウリ◇

促成作型は年内の着果負担や12月後半からの日照不足により、1月の樹勢が弱く推移し、果実伸長が鈍く、出荷量は減少しました。2月上旬の日照時間の増加に伴い、樹勢は回復、出荷量も増加傾向です。ハウス内温度の確保、こまめな摘葉や摘心、十分なかん水等により草勢維持に努めましょう。

つる枯れ病が一部ほ場で散見されます。温湿度管理でべと病、菌核病等病害対策をしましょう。コナジラミ類などは平年並みです。3月から天敵導入予定の場合は準備しましょう。

半促成作型は、2月初旬を中心に定植されています。3月上旬から産地全体で出荷開始の見込みです。

◇冬春ナス◇

1月下旬の曇雨天により樹勢が低下していましたが、天候の回復とともに樹勢は回復傾向で、果実肥大も良くなっています。3月上旬に出荷の山が来る見込みです。

「PC筑陽」は、収穫の山谷があり、着果負担が大きくなると樹勢が低下しやすいので、早めの追肥等で草勢の維持に努めましょう。また、高夜温管理のため暖房機が稼働しており、懸念された灰色かび病の発生は少ないです。一部で茎えそ細菌病、コナジラミ類が発生しています。換気、湿度管理等による病害対策を行きましょう。

◇モモ◇

加温栽培は、平年並みの1月下旬～2月上旬のビニル被覆でしたが、暖冬の影響で加温開始を3～4日遅らせている産地もあります。

無加温栽培は、2月上旬から順次被覆(平年より3～4日遅れ)、露地栽培は、せん定作業が終盤を迎えています。ハウス栽培では、被覆後から開花まで日中の高温時(25℃以上)の換気を徹底しましょう。

◇トルコギキョウ◇

1月の出荷量は、暖冬の影響で平年よりも10%多かったです。一方、販売単価は他産地からの入荷や台湾からの輸入量も増加しなかったため、平均190円以上とかなり高かったです。

春出荷(3～5月)作型の生育は、暖冬で2次～3次小花の発蕾時期となっており、出荷開始は平年よりも2週間程度早まる見込みですが、低日照の影響でブラスチングの発生も懸念されます。適時、整枝と摘蕾作業を継続し、ブラスチング対策を徹底しましょう。

灌水量は最小限とし、急性萎凋症を防止すると同時に、ハウス内の湿度を低下させ、斑点病、灰色かび病の対策を徹底します。開花期は花の小型化を防ぐため夜温12℃以上で管理しましょう。

◇畜産◇

1月の肉牛枝肉単価は、和牛去勢(A4)で前年比94%、過去5年平均比92%と低水準となりました。消費税増税後の消費者の和牛離れが続いており、輸入牛肉等の低価格品に流れています。

省令価格は、前年比99%、過去5年平均比99%とほぼ前年並みの水準を維持しました。これは、和牛よりも値頃な交雑種等に消費がシフトしたためです。

厳寒期のため、子牛の防寒対策を徹底しましょう。

近隣国では口蹄疫等、国内では豚コレラ等家畜伝染病が続発しています。飼養衛生管理基準を遵守しましょう。